



# 豊かな資源の宝庫 あと一步で 鹿角は日本一になれるんです！

## その仕事と鹿角の魅力を語る

討議資料

Q & A

Q：今日は関さんに、お仕事や鹿角の魅力などについて伺いますが、まずご家族は？

A：私は今、舟場の築200年の古民家に住んでいますが、東京に妻と息子が二人、息子のお嫁さんと孫が一人います。

Q：どうして単身で鹿角に帰って来られたんですか。

A：しばらく鹿角を離れていましたが、心はいつも鹿角とともにありましたね。鹿角を離れてもその魅力・素晴らしさは、どこまでも私を追いかけてくるんです。退職を機に鹿角に帰って来てしまいました。私は跡取り息子であり、それまで家を守ってくれていた母に喜んでもらったことも、忘れられません。

Q：ではその鹿角の魅力・素晴らしさを、じっくり語っていただきましょう。まず、関さんが山や森林の仕事に携わることになったきっかけは何でしたか。

A：私は鹿角で生まれ育ち、百人一首かるた大会や町廻り駅伝に出たり、七夕の大太鼓をたたいたりしていました。高校生の時八幡平の縦走に参加し、八幡沼や長沼の湿原と高山植物、もうせん峠を通り、焼山に登りました。鳥海山、岩手山、八甲田を望み、霧と晴れ間の中を歩きながら、ふと「山で働くのもいいな」と思ったのが始まりです。

Q：京都大学では貴重な経験をされたそうですね。

A：京都大学に合格すると鹿角の教育に尽力されてきた毛馬内の高橋克三先生に「湖南先生がつくった大学へ入ったね！」と喜んでいただきましたが、入学式で学長が「京都大学の建学の精神は内藤湖南にある」と言われ、東洋史学の授業が「内藤湖南の説によれば」で始まったのには驚きました。本業の林学でも毛馬内の瀬川清子先生の『食生活の歴史』が使われており、鹿角の先人が京都大学でここまで影響力を持っていたことに深く感動しました。鹿角には日本の発展に大きく貢献している方々がおられます。その足跡を鹿角の財産として大事にしていきたいと思っています。

Q：50年間、全国に「鹿角を持ち歩いていた」とか？

A：農林省に入り、林野庁を主な職場として福島、栃木、群馬、長野など全国の山々で勤務しました。この間ずっと花輪の大里武八郎先生の『鹿角方言考』と瀬川清子先生の『食生活の歴史』を持ち歩いていました。『鹿角方言考』は鹿角の言葉だけでなく、衣食住やお参りなど民俗学的な辞典でもあり、『食生活の歴史』は農山村の食生活を論じた本ですが、この2冊の本のおかげで各地の言葉や民俗、食文化に関心を持つことができ、それぞれの地域と鹿角との交流の可能性を考えを巡らせたりしていました。この体験は私が政策を考える上での一つの大切なベースになっています。

Q：なるほど。いつも鹿角と一緒にいたわけですね。

A：職務のおかげで、多くの鹿角人とお会いすることができました。林業では鹿角の方が結構いて、高い技術力と知見を持って活躍しておられました。尾去沢鉱山や小坂鉱山の関係者も多く、私は鹿角人であるというだけでずいぶん助けていただきました。中部森林管理局長として長野県副知事の阿部守一さんにご挨拶にうかがった時、阿部さんは「父は谷内出身で、花輪高校卒業生です」とおっしゃっておられました。現在は長野県知事として活躍しておられますが、長野県と鹿角市とは共通点も多く、今後蕎麦やリンゴや桃、スキーなどで交流が期待できます。

関厚プロフィール ▶昭和29年2月14日鹿角市花輪に生まれる ▶昭和47年花輪高等学校卒業 ▶昭和51年京都大学卒業 ▶昭和51年農林水産省入省、農政・林政に取り組む ▶平成元年農林金融公庫（現日本政策金融公庫）▶平成6年福島県庁森林土木課長 ▶平成11年林野庁基盤整備課長 ▶平成15年中部森林管理局長 資格 技術士 林業技師 衛生管理者 主な役職 舟場自治会長 花輪高等学校同窓会長 花輪かるた会副会長（～令和元）

Q：特に印象に残っている仕事は？



A：国有林では歴史的、伝統的な建築物の維持のために木材を供給していますが、私は伊勢神宮の式年遷宮という20年に一度すべての神社を建て替える事業に携わらせていただきました。これは1300年前から続いている事業です。平成17年6月3日に長野県木曾郡上赤町赤沢で行われた御杣始祭では、私とその木材を選定するという重責を仰せつかりました。これは絶対に失敗の許されない仕事でした。儀式の時隣席にいた方に「関くん、昔はこの仕事は万一失敗すれば切腹ものだったんだよな」と真顔で言われたことを今でも覚えています。

Q：すごい経験でしたね。隈研吾さん設計の東京オリンピック・パラリンピック競技場の建設にも関わったとか？



A：今回の新国立競技場建設には日本の全都道府県から木材が集められました。設計者の隈研吾さんは、世界の祭典である東京オリ・パラの競技場は、鉄とコンクリートではなく絶対に木でなくてはならないという信念を持っていました。しかもその木材は国際的なPEFC森林認証基準（合法性、持続性、環境保全、労働安全、地域の伝統を守る）を満たす森林のものでなければならず、それが全都道府県から集められるということは、日本の森林国土全体の健全性・持続可能性を象徴するものなのです。このミッションを受け、全国を飛び回って各県で森林認証を行い、適正な森林経営をしている森林より木材が出され、国立競技場は完成したのです。この競技場を完成させたこと自体が、日本の未来に大きな希望を与えることだと私は考えています。

Q：では鹿角に話を戻します。鹿角の印象は前と比べてどう変わりましたか。また今はどう過ごしておられますか。



A：最近では急激な人口減少、生まれる赤ちゃんの激減、若者の県外流出、公共事業の減少、経済の行き詰まり、商店街には活気がなく、医療・福祉への不安など、多くの市町村が抱えるような問題が大きくなっています。しかしそれでもなお、私が行ったどの市町村と比べても、「わが故郷鹿角」ほど恵まれているところはないと断言できます。豊かで美しい自然はもちろん、温泉や宿泊施設、歴史や文化や祭りなどの観光資源、りんごや桃や野菜も美味しく、人々は温かく人情味豊かで、どれをとっても「わが鹿角は日本一」というのが今の私の鹿角の印象です。

私は若い頃、鹿角組合病院の建設や畜産業の立ち上げなどに関わり、佐藤洋輔市長はじめ鹿角市や農協の皆さんに学ばせていただいたことにずっと感謝しておりました。帰郷後も森林評価の仕事しながら鹿角市先人顕彰館の研究員や秋田県森林審議会委員として地元振興のお手伝いをさせていただき、鹿角産業文化研究所を立ち上げ「鹿角学講座」を開設して鹿角の未来について多くの方々からご意見をいただき、学ばせていただいたことに感謝しております。

Q：関さんには、『北東北ゴールド構想』というスケールのでかい構想があると伺いましたが…



A：「人は一人では生きられない」といいますが、市町村も全く同じです。鹿角は北東北の中心にあり、豊かな自然に囲まれ、半径100キロ圏内には200万の人が住んでいます。黄金の鉱山の歴史があり、産業や文化に恵まれています。ここには県境がありますが、住んでいるのは気質のよく似た人々です。交流を妨げているのは、私たち自身にほかなりません。鹿角市の方から隣県や近隣市町村に手を延べれば、その協力関係はすぐにも現実のものになります。

では協力関係を結んで何をやるのか。私は、藻谷浩介さんが提唱している「里山資本主義」を推進すべきだと考えています。山と森林を仕事の間としてきた私には、「マネー資本主義」で荒廃しつつある現代社会を立て直すには、もはや「里山資本主義」しかないと思えます。鹿角そして北東北には豊かな森林と美しい農地があります。里山資本主義を展開するための資源は豊富にあるのです。そしてこの連携の輪を全国各地の市町村にも広げたいのです。

市 政	市民との対話・交流を盛んにし、透明で活力ある市政を実現します
産業・経済	県・隣県・国とのパイプを強化し、北東北経済圏の確立に努めます
医療・福祉	医療・福祉を充実させ、誰もが安心して暮らせる鹿角をつくります
教育・共同	女性と若者の声を反映させ、共同して未来に輝く鹿角をつくります
自然・文化	豊かな自然と伝統文化を生かし、品格と風格のある街をつくります

**市政**  
**ビジョン**  
やるぞ！

市民との対話  
鹿角の力を結集  
**関あつし**

**関 厚 後援会事務所**  
鹿角市花輪字上花輪344  
電話・FAX 0186-23-2125

**関 厚 後援会連絡所**  
電話・FAX 0186-22-4555  
携帯電話 090-2455-7653

公式ホームページ

メール [seki1954@icloud.com](mailto:seki1954@icloud.com)